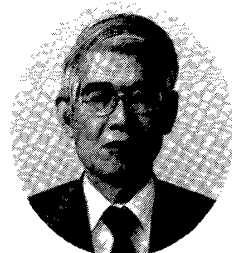


企業とAI

山田 博*



最近、大学・研究所だけでなく、一般企業でもAIの研究が盛んになってきましたが、とりわけ企業のAI研究には種々の立場があります。

その1つはAIを自社の仕事に役立たせようという立場です。その時に遭遇する一番大きな問題は、自社のもっている知識、ノー・ハウのどれに価値があるかを識別することです。AIを導入しようとする、今までは常識、あるいはあたりまえと考えられていたことが重要であることに気づくことがあります。換言すると、AIを導入するためには、知識に対する価値を認識しなければなりません。そういった知識をどれくらい身につけているかが、AI導入の成功と不成功の分かれ道になりますし、また、知識に対する価値を認識できる企業がAIの時代に生き残ることになります。そして、現在のAI技術をマスターして次に進もうとするときに、その技術の限界と人間の偉大さを感じるようになります。

もう1つは、コンピュータメーカにおけるAIの研究です。ここでは、エキスパートシェルのようなツールの研究、ユーザでのシステム構築に対する共同研究といった実用面に近い研究から、わりあい基礎に近い研究まで幅広く行われています。

AIの最終目標は人間の頭脳に近づくことです。昔、鳥が飛ぶのを見て、あのように空を飛んでみたいと大勢の人が思いました。中には腕に羽を着けて、高い所から飛び降りた人もいます。また凧に乗って空中に上がった人もいます。ライト兄弟が初めて飛行機で飛ぶのに成功するまでこの状態は続きます。ライト兄弟が、なぜ成功したかという、その時までのガソリンエンジンの進歩もありますが、空気力学ができて、鳥がなぜ空を飛ぶことができるかがわかってきたからです。彼らは空気力学の基礎をそのとき知っていたのです。その知識が世界で初めての飛行を成功させ、またその後の航空機の驚異的發展を可能にらしめたのです。

今のAIの状況は、腕に羽を着けてばたばたやっていた状態に似ていると思います。エンジンに相当するコンピュータの能力は、昔に比べればずいぶん上がりました。さらにパワーアップすべく研究をしていますので、そのうちには離陸できるかも知れないと考えている人もいます。しかし、どのくらいまでパワーアップさせれば離陸できるかはまだわかっていません。さらに、思考がどうして行われているかという基本的な問題については、解決の曙光も見だしていませんが、何らかのきっかけをつかもうと努力中です。では、今の研究は意味がないかという、そうではありません。昔、腕に羽を着けて飛ぼうとした努力、あるいは、何としても空を飛びたいという夢を持ち続けたことがその後の成功につながっています。AIに対する研究もいつかは実ると思いますし、また、現在の努力なしに明日の成功はありえません。

しかし、人間の頭脳に関する基本的問題に関しては、メーカの力の及ぶ範囲は限られています。この問題が解明されたときに、初めてAIが大きく進歩することは間違いありませんので、大学・研究所などにおけるこの方面の今後の精力的な研究を期待するとともに、人工知能学会がそのために大きな役割を果たすものと信じています。

* (株)富士通研究所常務取締役